令和３年度　高浜市立南中学校　学校自己評価計画

令和３年６月版
No1

学校教育目標	校訓「自己を高めよう」をめざし、知、徳、体の調和のとれた人間性豊かな生徒を育てる	経営理念	使　命	自立した大人になるための基礎づくり
めざす生徒像	「将来を見据え、今の自分を作り上げていく生徒」 ・真剣に学び合う生徒　・けじめのある行動をする生徒　・自らの心と体を鍛える生徒		経営展望	「南中文化の向上」 学校に協力的な南中学校区の地域文化を基盤に、生徒の将来の自立に向け価値のある生徒文化と教師文化の質の向上を目指す。

評価計画（中期経営目標を設定して８年目）【新規☆４年目】

「経営展望（中期経営目標ａ・ｂ・ｃ・ｄ）」と「今年度、特に重点的に取り組むこと（☆）」　／　「実現に向けての現状（進捗状況）（◇）」と「今年度の位置づけ（◆）」

ａ　授業力向上	ｂ　学級経営力向上	☆特別な支援を要する生徒・不登校生徒に対する指導体制の充実	ｃ　集団の中で、課題を発見し解決する力をつけさせる指導力の向上	ｄ　まちづくりへの協働・貢献	☆多忙化解消の推進
◇主題研究の３部会が機能し、教員同士の「学び合い」が日常的に行われている。特に、生徒同士の考えを交流させるためにﾀﾌﾞﾚｯﾄ端末が積極的に活用され、授業方法や内容に幅が見られるようになっている。 ◇公開授業を通じて「授業だより」（教員向け）や「窓」（生徒向け）を発行することで、執筆者の授業を分析する力の伸長、教員と生徒が目指す「学びの姿」を共有することにつながっている。 ◆研究委嘱２年目にあたる今年度は、昨年度までに構築した研究組織や研究推進ｼｽﾃﾑをさらに充実させることで、個々の教員の授業力向上と教員と生徒が一体となっての「学びの姿」の確立をめざす。	◇「級訓を核にした学級づくり」やリーダーとフォロワーの役割という意識は、教師・生徒ともに育ってきている。行事前後には意識が高くなるが、年間を通して級訓の実現という視点での指導が定着するには至っていない。 ◇個々の生徒や学級の特性にまで目を向けた上で、リーダーやフォロワーの指導や支援が成されることで、学級らしさが前面に出た活動の展開が期待できる。 ◆行事への取組と日常の学級諸活動を関連付け、一年間を見通した学級経営の意識を定着させる一年とする。また、一人一人の個性を踏まえたうえで、それが十分に生かされるような実践を積み重ねていく。	◇日本語指導教室、通級教室、不登校適応教室において、さまざまな困り感をもつ生徒への指導･支援の体制が確立しつつある。利用する生徒の満足度も高く、指導の効果を上げている。 ◇担当する教員の専門性や複数の教員が担当する場合、指導の一貫性という点に弱さがある。 ◆研修の充実により、専門的な知識やスキルを持った教員の育成と個々の教員の指導力向上を図る。 ◆教員の特性、および能力を踏まえた適材適所の配置により、指導体制をより実効性の高いものへと転換していく。	◇生徒の自主性、主体性を尊重し、生徒自身の手で課題の発見、解決に向けて活動させようという教員の意識は高い。生徒会や室長会などの活動において成果が見られる。 ◇生徒への指導は行事等の活動に限定される傾向がある。普段の生活の中での指導の内容や方法に対する意識や理解が浅い。 ◆これまで実施してきた宿泊を伴うリーダー研修会については、最終年とする。これまでの成果を洗い出し、次年度からの取組について計画を開始する。 ◆生徒会、室長会の活動を通じて培われた生徒の力、教員の指導力を広げていく一年とする。	◇「南中学校協力者会議」を立ち上げたことにより、学校を支援していただく組織、団体につながりが生まれ、今まで以上に幅の広い活動を展開する素地が形成された。 ◇一人一台のタブレット端末が貸与されたことにより、これまでにない方法、内容での学校から家庭への情報発信や家庭との情報共有が可能となっている。 ◆従来の地域との協働的な活動に加えて、生徒の自発的な活動を促す取組を進める。 ◆目的に応じて媒体を使い分け、より効果的な情報発信を行う。また、家庭と学校の双方向の情報のやりとりを試行する一年とする。	◇時間外勤務月４５時間以内の実現に向けて、職員への意識付けを図っている。人的措置がないまま、個々の職員の業務量を削減することには限界がある。 ◇業務削減については、管理職から示されたものは浸透しているが、個々の職員からの具体的な提起はほとんど見られない。 ◆業務内容についての見直しをいっそう進め、不要なものについては大胆に削減する。 ◆年休の取得促進を図るため、長期休業中や定期テスト実施日に計画的に取得できるシステムを確立する。 ◆多忙の現状を周知し、地域団体やＰＴＡに積極的に業務を依頼していく。

学校経営の軸、および今年度、特に重点的に取り組むことに対する考え方

ａ　教師の授業力	ｂ　学級経営力	☆特別な支援を要する生徒・不登校生徒に対する指導	ｃ　集団の中で、課題を発見し解決する力をつけさせる指導	ｄ　まちづくりへの協働・貢献	☆多忙化解消
・授業は学校の教育活動の中心である。授業力を向上させることは、学校全体の最重要課題である。中堅・若手教員が多数を占める教師集団が、「授業づくり」を通して学び合えるようにするためにも組織、環境を意図的につくっていく。教員同士が切磋琢磨しながら、新しい授業を創造していけるよう、個々の教員が特性を生かし、力を発揮できるようにする。 ・目指すべき「学びの姿」を教師と生徒が共有することは、授業改善の大きな力となる。目指す姿を常に意識、確認しながら日々の授業を進めていくことで、「南中学校らしさ」のあふれる授業を作り上げていく。	・学級は教育活動を実施していく上での母体である。生徒の社会性を育む上でも、学級における諸活動は大きな意味がある。集団として共通の目標の達成を目指すなかで、自己の有用感や肯定感、他者を認めることの大切さを理解することは、生徒の成長につながるとともに生涯にわたる生きる力を育むことにもなる。集団と個を適切に見取る力を教師がつけることが必要である。 ・学級集団を成長させていくためには、長期的な視野に立って指導する必要がある。生徒と目標を共有しながら計画、実行、振り返り、目標の再設定を繰り返していくサイクルを意識した指導を行う。	・集団の中で「一番弱い存在に視点を置いた指導」は、すべての生徒にとっても有用である。こうした姿勢で生徒に向き合うことは、教師の指導力向上につながる。個々の生徒の困り感に寄り添い、支えることができる教師を育てていく必要がある。 ・特別支援学級、日本語指導教室、通級教室、適応指導教室には主担当となる教員を配置するが、すべての教員が支援者であるという自覚を持って指導にあたる。そのために情報共有、共通理解を図る場を設定する。さらには、個々の教員の適性や個性を発揮できるように組織運営を行っていく。	・集団が活動を進める上で課題は必ず存在する。課題の解決が図られることによって集団は前進し、成長する。将来、社会に出てさまざまな集団に属することになる生徒にとって、課題発見、仲間と共に課題解決する力は必要不可欠である。学校においては、意図的に課題が生じる場を設定し、試行錯誤しながら解決する経験をせていく。順位や成績にとらわれることなく、生徒が成就感、達成感を得られるように、教師はファシリテーターとしての役割を演じる必要がある。集団の質、役割、規模、目的に応じた指導ができるように経験と研修を積み重ねることが必要である。	・地域社会の一員として中学生ができることは多い。しかし、学校・生徒の側にも地域の側にも両者が協働した活動のあり方については模索が続いている。これは、活動の単位が全校、学年、学級といった比較的大きなものであったことに起因している。従来の取組に加えて、小集団や個人といった単位で活動も考えていく必要がある。 ・地域で活動するさまざまな組織・団体と連携することが必要である。学校と相互に情報をやりとりできるようにすることで、生徒が活躍できる機会をとらえ、場を提供していく。	・多忙化解消は、教職員にとって喫緊の課題となっている。ライフアンドワークバランスを保つことは、ひいては健全な学校運営につながることを教職員に周知徹底していく必要がある。教職員の働く意欲を尊重しつつ、過度の負担や無駄を省いていくことは管理職の務めである。現在の業務を大胆に見直し、具体的な削減策を実行していく。 ・予算措置がなされれば、多忙化解消につながる業務の削減が可能である。削減できる業務の内容と量を具体的に示し、学校関連予算の充実を求めていく必要がある。